

PHD LETTER

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

PHD LETTER
Volume
150
2022.7

公益財団法人PHD協会
2022年度会報150号



शुभकामना

特集

スバカマナ (おめでとう)、サビナさん!
ネパール全国統一地方選挙に当選

PHD LETTER Volume.150

Contents

- P.2 2022年度 事業方針・計画
- P.3-4 2022年度研修生レポート
セティア ブディマン、アシカ・チャルマカール
- P.5 24期国内研修生&多文化共生インターン自己紹介
- P.6 2022年度新スタッフ紹介
- P.7-8 **PHD Movement** vol.33
ウクライナ避難民支援活動 報告
- P.9-10 With Myanmar
- P.11 日々是東奔西走
宇宙船地球号で暮らす-多文化共生してる？-
- P.12 PHD活動紹介2022年4月～2022年6月
- P.13-14 特集 サビナさん、ネパール統一地方選挙に当選！
- P.15 PHD News

表紙写真/サビナさん(2018年度)が所属する政党の祝賀会

～ベターハーフを超えて～

温故知新 岩村語録 その22

「まず何よりも第一に、我が家の内務大臣であり、ベターハーフというよりは75%を占める私の最愛の妻の内助の功なくしては何もできませんでした」

「出典：1981年度国際ロータリー大会・ブラジル・サンパウロでの受賞メッセージ」

岩村先生も偉大だが、史子さんも偉大な方だった。最初は緊張したものだが、その素朴さ、温かさに触れ、お会いすると癒される自分がいた。周りの人を幸せにする方だった。ある人が「本当にすごい人は偉そうにしない」と史子さんを評した。心から納得したものだ。岩村先生亡き後、史子さんは私たちの道標でもあった。祈りを捧げます。(さ)



PEACE, HEALTH&HUMAN DEVELOPMENT
公益財団法人PHD協会

PHD運動とは1962年よりネパール、東南アジアを中心に医療活動に従事した岩村昇医師の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげ、平和 (Peace) と健康 (Health) を担う人づくり (Human Development) をすすめ、共に生きる社会をめざし、1981年に今井鎮雄(初代PHD協会理事長)と共にPHD協会を設立しました。

PHD LETTER 150号

発行：公益財団法人PHD協会
住所：〒653-0836 神戸市長田区
神楽町3丁目7-4
電話：078-414-7750
FAX：078-414-7611
E-mail：info@phd-kobe.org
URL：http://www.phd-kobe.org
郵便振替口座：公益財団法人PHD協会
01110-6-29688



2022年度 事業方針・計画

方針

「Withコロナの新しい研修事業」と「国内での居住支援事業の両立」

世界ではミャンマー、アフガニスタン、ウクライナと「平和」、そしてありきたりで尊い「日常」が脅かされています。PHD協会は研修事業を通じて草の根からそれらを積み上げていく取り組みを約40年間続けてきました。現在の暴力に満ちた世界情勢に対抗していくにはささやかな取り組みかも知れません。しかしながら、私たちの手の中には武器ではなく、草の根の繋がりがあり、草の根での交流を育んできました。今こそその継続が大事だと感じています。

今年は研修事業と居住支援事業を同時に行う初めての年となります。草の根交流を積み上げることが世界の平和につながると信じて、今年も皆さんと共に歩んで行きたいと思えます。ご支援よろしくお願ひします。

研修事業

～withコロナの新しい研修スタイル確立～

2022年度はコロナ禍の中で中断してきた研修生招聘が3年ぶりに実現した。今までのようなホームステイを軸とした研修事業は難しい。研修を支えて下さる皆さんに安心して関わってもらえるようなスタイル、かつ研修生にも学びを持ち帰ってもらえる研修を実施できることを目指す。新しい研修としては居住支援事業を通じたソーシャルワーク研修を取り入れたい。チャレンジングな一年となる。皆様のご協力をお願いしたい。

居住支援事業

～深く&育成～

居住支援は相談ベースでの対応となるが、テーマとしては「深く&育成」としたい。「深く」は対象の変化。留学生など広く支援してきたが、今後はより支援が必要な人を対象とする。具体的には入管からの仮放免者や難民申請者、生活困窮者にフォーカスする。

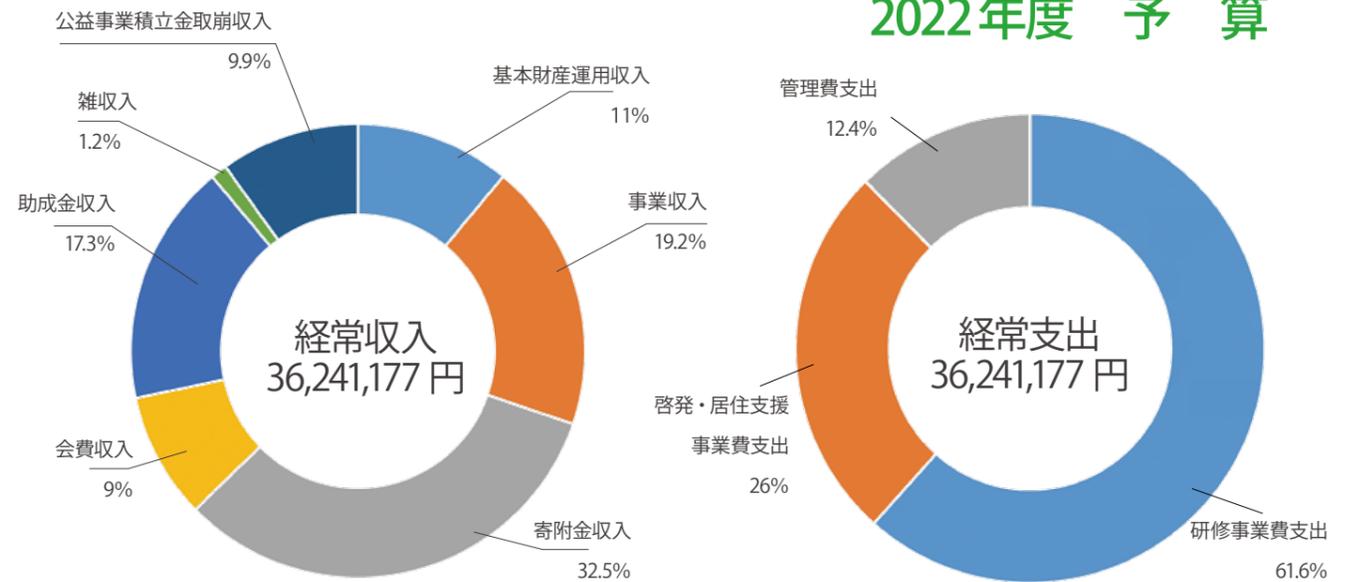
「育成」は居住支援だけに留まらずに、今まで培った研修のノウハウを活かし、育成にも寄与していきたい。登録支援機関としての認可も受けたので就労支援も行っていく。

広報・啓発事業

～動画配信と講演活動～

40周年事業の経験を活かし、動画配信サイトにて、これまでに撮影した動画に加え、日常活動の動画を使った配信に注力する。また、困窮外国人の2年の支援活動を通じて得た、経験と知見をもとに、「外国人の課題ではなく、私たち日本社会の問題」を念頭に、発信していく。

2022年度 予算





PH 38期研修生紹介 (2022年度)

芳田 弓生希=文

セティア ブディマン インドネシア / 26歳

西スマトラ州ソロ郡タベ村から7人目の研修生。州都パダンからバスで3時間程内陸部に入った山村で、人口約1,600人。赤道直下ですが標高約1,100mに位置し、朝晩は肌寒いほどです。協同組合長の父、2003年度元研修生の母、姉1人、妹2人の6人家族。家では、稲作の他、父が大学教授と共同で牛を、姉が採卵用の鶏を、ブディさんは食用肉用の鶏を飼育しています。敬虔なイスラム教徒のブディさん。村では一日5回お祈りをしますが、うち2回は可能な限りモスクへ行っていたとのこと。また来日直後に始まった断食月の間は、日の出から日の入りまでの間、食事水分も一切とりませんでした。大学では畜産を学び、家で実践。鶏にはトウモロコシ、米ぬか、大豆、魚粉などを混ぜた餌をやり、牛にはサトウキビの葉、米ぬか、パーム油の搾りかすなどを混ぜて発酵させた飼料をやっています。

ブディさんの研修したいこと

畜産

村の課題は、牛の飼料が手に入りやすく、飼料の材料が季節によって異なること。ま

た栄養価の高い飼料を安定して与えることが難しく、牛の成長が遅いことだとブディさんは考えています。牛の病気で多いのは疥癬症(ダニによる感染症)で、ひどい時には死ぬこともあるそうです。日本では、牛の飼料、疾病対策、繁殖、全体管理(マネージメント)の研修を希望しています。また牛に加えて、養鶏の研修も希望しており、主に飼料の配合や与え方、疾病、養鶏で使用する機器などについて学びたいと考えています。

村で起業

近年、タベ村では降水量が減り、稲作や畑などの農業だけで生計を立てることが難しくなっていると言います。そのため仕事を求めてパダン、ジャカルタ、海外ではマレーシアへ出稼ぎに行く人が増えてきているのが現状です。そこでブディさんは、将来村で畜産会社を立ち上げて働く場を作り、村の人たちを雇用したいと考えています。



ロータリー 米山記念奨学会

本年度は米山記念奨学生として、ブディさんが、インドネシアと縁の深い篠山ロータリークラブでお世話になります。毎月の例会に出席し、研修や日本の生活の様子などを報告、交流を通じて学びます。



古杉 和広さん
篠山ロータリークラブ

ブディさんのカウンセラー

PH 38期研修生紹介 (2022年度)



アシカ・チャルマカール ネパール / 24歳

カブレバランチョーク郡マンダンドウプール地域マイダン村出身。首都カトマンズから車で約4時間、さらに徒歩1時間の村で、人口約170人、約40世帯。サビナさん(2018年度) やスシラさん(2019年度)の村からは徒歩約30分です。2015年ネパール大地震でアシカさんの3階建ての家は全壊、村人たちが瓦礫の中から助け出してくれましたが、とても辛い経験をしました。家族は父、母と3人の兄。大学では教育学を専攻しました。両親はトウモロコシ、トマト、ジャガイモ、ニンニク、粟などを栽培し、山羊、水牛、鶏を飼育しています。台所での調理には主に薪を、ガスはたまに使います。また、雨水をタンクに貯め、洗濯、水浴び、トイレ、家畜の飲み水に利用。人の飲み水は、1年前に家の前に設置された水道の水を使っています

が、水が出るのは1日おきで、6-7時の1時間だけです。

アシカさんの研修したいこと

障がい者、女性、子どもの生活や健康の改善につながる研修を希望しています。

障がい者福祉

地域に障がいを持つ子どもたちがいますが、親はケアの仕方がわからず、子どもたちは存在自体を無視される、学校では進級できず中退、家の中に籠るなどの課題があります。

人権

村にはダリット(不可触民)と呼ばれるカースト最下層の人たちが住んでおり、アシカさん自身もダリットです。高いカースト



の年配者からは「食事は別々に」、「家の中に入らないで」と言われた経験があります。また、男性に比べて女性が担う仕事は多く、20歳を過ぎた未婚女性は「まだ結婚しないのか?」と言われるなど、男女間の差別や偏見もあります。

保健衛生・保育・教育

助産師として地域で活動するウルミラさん(2010年度) やランマヤさん(2012年度)に影響を受け、子どもと女性の健康を守る母子保健にも強い関心を持っています。また子どもたちの健康管理や就学前・学校教育も学びたいと考えています。

コロナ禍で2年間、海外からの研修生を招へいできなかつたが、インドネシアのブディさんは4月2日に、ネパールのアシカさんは5月5日に無事来日。それぞれ自宅(みんなのいえ内の個室)待機とPCR検査での陰性再確認を経て、神戸YMCAさんでの日本語研修、そして6月下旬に最初の現場研修に出ることができた。しかしミャンマーのトゥー・トゥー・ウェイさんは、軍によるクーデター後の危険な状況が続く来日を延期。彼女が他の2人と共に来日できなかったことは本当に残念でならない。

24期国内研修生 & 多文化共生インターン自己紹介



ユウキ カナ
結城花菜

居住支援・研修 担当

こんにちは！神戸市外国語大学国際関係学科2回生の結城花菜です。PHD協会との出会いは偶然のような運命のようなものでした。相手の顔が見える活動をしているところに魅力を感じ、国内研修生として活動させていただくことになりました。

気まぐれなおおざっぱな私ですが、誰かの役に立ちたいという思いは揺るぎません。将来の目標に少しでも近づけるよう、PHD協会でたくさんのことを吸収したいです。人との出会いを大切に、いつか誰かの役に立てるよう行動していきます。よろしくお願い致します。

他己紹介

子犬さながら、ウルっとした大きな瞳で、「今日は何をしましょうか!？」と元気にプレッシャーをかけてくる結城さん。それもそのはず、国内研修生の募集をしていない時に、自分から問い合わせをする積極的行動派。海外に繋がる将来を描いて、研修生や「みんなのいえ」居住者のサポート、助成金申請、事務雑務まで、今できることを真摯に取り組む姿、拝んでおります。 広報・啓発担当 中島 麻

私はイタnderミョーと申します。27歳です。2016年に工学大学を卒業して、ミャンマーにある日本の会社に勤めました。日本語に興味を持ち、日本語の勉強を始め、日本へ留学することにしました。それで2020年11月3日にミャンマーから来日しました。一年半、日本語学校で勉強してから、今は東京国際ビジネスカレッジ神戸校で学んでいます。将来は日本語通訳者か翻訳者になりたいです。日本で働いている皆さんの実習生は、日本語があまり話せないで困っているから、会社と実習生の間で良いコミュニケーションを取れるように、通

訳の仕事をしたいです。PHD協会では日本語を教えてもらい、ときどき、日本語からミャンマー語の翻訳をしています。

他己紹介

「いろいろな場所に出かけ、人に出会いたい」というミョーさんは、2020年に留学生として来日、学業とバイトと両立させてきました。自身の経験をもとに、在留外国人の方への職業・居住相談や、ミャンマー語⇄日本語の通訳・翻訳に関わってくれています。穏やかな中に強い意志を持った彼女の活躍と飛躍に乞うご期待。 研修担当 芳田 弓生希



イタnderミョー

居住支援・広報・啓発 担当



ゲンティテウハー

居住支援・広報・啓発 担当

初めまして、日本経済大学経済学部商学科4年生のゲンティテウハーと申します。

PHD協会との出会いは去年の10月に長田区にあるKICCでボランティアに参加したときです。困窮している在住外国人を手伝ってあげられると思って、居住支援担当として半年アルバイトをしていました。

PHD協会では色々な仕事をして、役に立つのだという意識を持ってから、興味が沸く様になりました。日本語の勉強以外にも、文化に触れ、感性を磨き、視野を広げたいです。母国との友好事業の手助けができるように、自分自身のスキルアップをしたい

です。どうぞよろしくお願い致します。

他己紹介

日本で観光業の勉強をしているハーちゃんは流暢な日本語を駆使して、誰とでもすぐに打ち解け、ウィットに富んだ話題を提供してその場を和ませてくれます。日本での生活が長いため、日常生活の知識も豊富で後からやってきた留学生の頼もしい先輩です。料理の腕も抜群で親睦会で作ってくれたエビ入りのサラダはみんなに好評でした。どんな業務も積極的に取り組みこなしてくれるので心強いです。

財務担当 古寺 瑞代

2022年度新スタッフ紹介



ミヤケ マイ
三宅 茉依

総務・ファンドレイジング副担当

初めまして。6月から総務・ファンドレイジングの補佐として働かせていただくことになりました、三宅茉依と申します。学生時代は、国際公共政策について学び、フィリピンへのフィールドワークに参加したことをきっかけに国際協力の仕事に携わることを目標としてきました。前職は大学の国際教育センターで職員をしておりましたが、

この度PHD協会のご縁を頂き、再び国際協力の仕事に携われることを嬉しく思います。PHD協会での仕事を通して、国際協力による地域づくりに貢献したいと思っています。どうぞよろしくお願い致します。

他己紹介

フィリピンの大学院留学やNGOでのインターン、在カンボジア日本国大使館勤務、中学校教員など様々な経験を持つ三宅さん。滋賀在住で通勤片道2時間半。「在宅勤務+時々出勤」となりますが、「草の根の国際協力・交流に携わりたい!」という熱い想いでPHDの門を叩いてくれました。丁寧にスピーディーな仕事ぶりの三宅さんは、早くも総務・ファンドレイジングの頼れる存在です。

総務・ファンドレイジング主担当 中村 朱里

サクマ リュウ
佐久間 隆

居住支援・研修担当

はじめまして、佐久間隆と申します。5月よりPHD協会にて居住支援・研修担当として勤務しています。私は約10年に渡り、国外の様々な地域における災害や人道危機に対応する支援活動にNGOや国連職員として携わってきました。昨年家族で神戸に移り住んだことをきっかけに、国内の社会的課題の解決に向けて、地域に根ざした形で対象者に直接関わる方法で取り組みたい

と考え、この一年間は大阪で生活困窮・ホームレス状態にある方への相談支援を行ってきました。そしてより専門的に日本で生活に困難を抱える外国人への支援に携わりたいと考えるようになり、PHD協会にて働き始めました。もうすぐ4歳になる子どもとパートナーと一緒に神戸で生活しています。どうぞよろしくお願い致します。

他己紹介

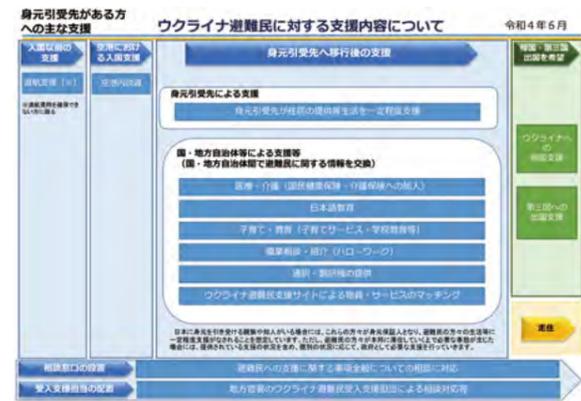
国内と海外両方での活動経験を持つ大型新人。半年に渡る契約交渉の末、PHD球団に加入。沉着冷静で時にミステリアスな横顔も。人と人を取り持つのが上手で、汗をかくのを厭わないので、業務では加入直後から救援投手として大活躍。プライベートは娘を溺愛するパパという噂。なんと前任者山本とはアメリカで面識あり。PHD加入はきっと運命だろう。

事務局長 坂西 卓郎

事務局長 坂西卓郎 = 文
～分かち合い実践録～

ウクライナ避難民支援活動 報告

2022年5月25日 神戸新聞



出典：法務省

7月3日時点で1,458名の方がウクライナ避難民(以下避難民)として日本に避難してきている。兵庫県に來られた避難民の方たちは60名を超える。PHD協会は神戸市国際課が事務局となっている「KOBÉウクライナ避難民支援ネットワーク」のメンバーとして避難民受入れに関わっている。本稿ではPHD協会での支援活動と難民受け入れの状況について述べたい。



コープこうべ兵庫店さんでのウクライナ支援募金
(2022年6月22日 神戸新聞)

神戸での避難民受入れ活動

PHD協会では、コロナ禍以降の2年間実施してきた居住支援活動の延長線としてウクライナ避難民支援を行っている。具体的には食料支援、家具や自転車の提供、情報提供、日本語教育、就労支援、地域との交流の機会などである。食料や物品の提供に

ついては多くの方からご支援いただいた。この場をお借りして感謝申し上げたい。

ウクライナ避難民の支援に関しては個人情報保護の観点やその注目度の高さから、なかなか活動の詳細をご報告できないことを心苦しく思っている。前述のようにウクライナ避難民支援については行政等も動いてはくれているが、それだけではうまくいかず、市民社会の力が重要なことを痛感している。公助、共助、自助だけでなく、互助が必要とされている。市民社会の支援や避難民当事者のネットワークでの相互扶助だ。その観点で、市民社会の連携で貢献できた事例について報告したい。

笑顔を取り戻した男の子(就園支援)

ある避難民のご家族が4月初めに来日された。お母さんと娘、そして就学前の息子さんである。「少しの間だけポーランドに避難するつもりだった」と母は語る。しかし、戦火は激しさを増す一方で、帰国を断念し友人を頼って日本に來たそうだ。就学前の子どもにとっては、訳が分からず気が付いたら日本だったようだ。精神的にかなりの負担だったと思われる。来日後、ずっと塞ぎ込んでいて、遊び道具で誘っても笑顔を見ることはできなかった。

しかしながら、現在は笑顔いっぱい遊びまわっている。実は民間の幼稚園さんが手を挙げてくれ、いち早く試し登園が開始され、1週間後には入園が決まった。こちらの幼稚園さんはPHD協会とは長年の付き合いで、息子さんの状況を相談したところ迅速に対応してくれた。市民社会での連携が就学前の男の子の笑顔を取り戻したケースだったと言える。

地域のお店との連携(就労支援)

「生活が前に進まない」、5月初旬に避難民の人たちから聞いた言葉だ。家が決まり、居住が始まって、仕事も就学も始まらない、という焦燥感を強く感じておられた。行政としては「就労支援はハローワークを通じて」となるが日本語が話せない避難民への仕事は限られている。PHD協会は無料職業紹介事業所としての認可を取得していることもあり、避難民の方への就労支援に精力的に取り組んでいる。

最初の事例が次項の新聞記事の事例である。少々小さいが



ひご一読いただきたい。

もう一つの事例として執筆時点では進行中だが、当会の強力なパートナーでもある生活協同組合コープこうべさんとの連携による就労支援である。面接等は終わり、7月頭から就労が開始する予定である。この方もウクライナでは店舗で働いていたということで、経験を活かした形となるが、日本語が充分でもない状況で受け入れていただけのことに感謝しかない。組合員の皆さんに改めてお礼申し上げたい。

また今回の避難民の特徴として、県内に点在している、という点がある。コープこうべさんは多くの店舗を持っておられるので、横展開ができれば就労に困る避難民の人たちにとって大きな機会創出となることを期待している。

難民受け入れと私たち

世界ではミャンマー、アフガニスタンとここ1年で多くの人たちが理不尽に平和な日常と故郷を奪われている。しかし、残念ながらそれらの難民や避難民に対して私たちの社会は温かい対応をしたとは言えない。アフガニスタンから避難してきた人たちも500人を超えるが、報道も少なく、また支援も限られているのが現状だ。

他方、今回のウクライナ避難民に対しては報道も多く、政府や自治体、そして民間、市民社会が様々な支援策を表明している。今までは難しかった在留資格変更や生活費の支援も迅速に

実現した。さらには入管のHPによると「支援申し出件数」は1,716件(7月1日時点)で避難民の数よりも多い。

それらの避難民支援自体は歓迎されるべきものであるが、ウクライナに限らず全ての海外ルーツの人たちに寛容な社会であることが望まれる。PHD協会も加盟している「NGO神戸外国人救援ネット」の声明には「ウクライナ避難民の受け入れをきっかけに、難民を受け入れる日本に変わることが望まれます」と締めくくられている。同感だ。今こそその機会だと思し、進めなければならない。ウクライナを特例としてはいけないと強く感じる。

避難民支援活動は続く。

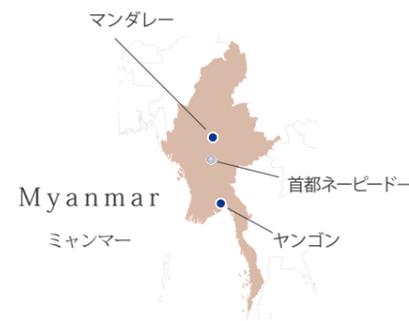
※難民、避難民の違い

法務省出入国在留管理庁は「戦火から逃れてきたウクライナの人々は、難民条約が定義する、人種、宗教、国籍、政治的意見などの理由で迫害を受ける恐れのある『難民』には該当せず、『ウクライナから避難してきた人』という意味で、便宜上『避難民』と呼称している」と説明しています。他方、国際的には「戦争」理由で難民として認定する動きもあります。

PHD With MYANMAR

モーママさんとタダインシェ村

～この子たちのために強くなりたい～



モーママさんの日本語教室、日本語試験に向けて



モーママさんの私設塾で勉強する子どもたち



濱 宏子=文

軍の支配が続くミャンマー。市民生活は日が経つにつれ、厳しく苦しいものとなっています。苦しい生活の中で、自分のできる活動をしているモーママさん(2013年度)に、現在の彼女の状況や村の課題を聞き取りました。

1. 学校のこと

6月上旬からミャンマーで始まった新学期。現在子どもを学校に行かせる親は約3分の1。残りの3分の2の子どもは私設塾などで勉強する。子どもを登校させる親は年をとって学歴がないと困るという理由などで仕方なく行かせている。一旦学校に入ったら、建物から出ない方が安全だ。

自分はそんな中、自宅の一室で私設塾の教師を続けている。月の月謝は7000 ky t (510円ほど)。他の塾に比べると月謝はとても安い。それでも、授業料を払えない

家庭の親からはお金は取らない。

毎日朝8時から11時、18人の子に算数・英語・ミャンマー語・歌や絵も指導する。他の村には1人で40人の子どものを抱えている人もいる。先生が全く足りていない。授業が終わると疲れて何もしたくない、でも午後からも日本語のクラスが2つ待っている。土日は家の仕事がある。教師のゼンゼンさん(2019年度)は今年も自宅で勉強を教える。自分が学校で教えれば自宅に残る子どもに誰が勉強を教えるのかという思いからの決断だった。18人の子どもの教えている時「今日も子どもたちは私についてくれた」と思うと嬉しい。今はまだザガインなど他の危険な地域に比べると安心安全に勉強ができる。「軍に反対する時、何も言われてはいないが、いつ捕まるのかも分からない。そして学校にいつ爆弾が落とされるかも知れない。私の村の村長が

亡くなった時は50人もの軍人が来て葬儀をチェックしていると情報が入ったので塾は急遽取りやめた。私服の軍人もいるので怖い。軍の車には近づかない、軍人がいる場所には近づかない。軍の人間はとても鼻が効く。軍はインターネットからも情報を得ている。生徒の小僧さんも托鉢中に見た情報などを私に教えてくれる。本当はフェイスブックで村の現状をシェアしたいが、今はフェイスブックのアップもやめている。平和になる日が来るまで我慢して待つ。そして平和な日が来たら全てを伝えていきたい。

2. 軍の見回り

軍の見回りは強化され、毎日3人、5人、多い時には7人ほど村にやって来る。自宅まではまだ来ない。軍の人間は自分が自宅で子どもたちを教えている事は知っているがCDM(市民不服従運動)をやっている事を知られているかはわからない。まだ何も言われてはいないが、いつ捕まるのかも分からない。そして学校にいつ爆弾が落とされるかも知れない。私の村の村長が

生活。自分は米も野菜も実家が作っているので食物は充分にあり、家族には感謝しかない。

生活。自分は米も野菜も実家が作っているので食物は充分にあり、家族には感謝しかない。

4. 友の自殺

バイクで10分ほどの村に住む弁護士の友人がPDF(人民防衛軍)に入ってサポートした事で第1人妹2人が捕まり行方不明になった。それを聞いて苦しくなり、友人は農薬を飲んで自殺してしまった。自分もし捕まると分かったら同じように自殺すると思う。トゥンティンさん(1993年度)も未だ刑務所から出られないでいる。*トゥンティンさんは、PDF(国民防衛隊)の人を家に泊めたことが軍に見つかり、捕まった。

最後に。

ミャンマーは今本当に大変です。村の中には現状を見て見ぬふりをする人もいますが、平和のためにできることは何かを自分で考えてほしい、何もできないと言うのは早すぎる。できないと言う前に何かを頑張ってみてほしい。はっきり言うとお金も必要、そして元気な身体も必要。けれど1番の願いはアウンサンスーチー女史が刑務所から出て、ミャンマーに再び平和が戻ることです。その日まで決してあきらめません。



軍の見回りに気をつけながら、朝は子どもたちに勉強を教え、午後からは日本語教室の授業と多忙なモーママさん。お昼休みの合間をぬって、私たちに話をしてくれました。悲しみ、怒り、苦しみ、悔しさが入り混じった想いを話しつつも、笑顔を見せてくれるモーママさんからは、絶対に諦めない強い気持ちが伝わってきました。未だ、先は見通せない現状ではありますが、元研修生たちとの対話と民主化へのサポートを続けていきます。

2021年3月に設立したミャンマー基金は、PHDミャンマーのモーママさんや元研修生たちとのオンライン会議を通じた対話により、必要な支援として、CDM(市民の不服従運動)参加のための生活費支援やスラムに住む困窮世帯と戦災孤児が集う孤児院への食費支援、衛生用品の購入費用などに活用させていただいています。

どうか引き続き、苦境にある草の根の人々へ、関心を持ち続けていただきますように、お願い申し上げます。

PHD 活動紹介 2022年4月～2022年6月

- 4月**
- 1日 年度初め会議 (坂西、中村、芳田、古寺、濱、中島)
六甲ウィメンズハウスWS (坂西)
 - 3日 38期研修生 セティアブディマン 来日
 - 4日 オルタナティブツアーSDGs動画収録 (坂西)
HYOGON運営委員会 (坂西)
 - 5日 2021年度NJ協議会NGO正会員の集い (坂西)
 - 6日 JICA関西・JICA-NGO等提案型プログラム協議 (坂西、中村、濱)
KOBエウクライナ避難民支援ネットワーク会議 (坂西、濱)
 - 7日 神戸市役所 市長室 国際部国際課 来訪 (坂西、濱)
 - 8日 社会福祉法人いたみ杉の子 訪問 (坂西、中村)
外務省NGO相談員キックオフ会議 (坂西)
 - 10日 2022学年度ロータリー米山記念奨学生オリエンテーション (坂西、濱)
 - 11日 NGO神戸外国人救援ネット 運営委員会 (坂西、濱)
外国人版トライやるウィーク実行委員会 (坂西、濱、中村)
 - 12日 株式会社メロディ・生活オリエンテーション (坂西)
 - 13日 第19回「多文化共生のための国際理解教育・開発教育セミナー」(坂西、中村)
 - 14日 第5回MSC勉強会 ウクライナ危機：社会全体での受け入れに向けて (坂西)
HYOGON三役会議 (坂西)
HYOGON運営委員会 (坂西)
 - 15日 丹波市国際交流協会・加東市国際交流協会 訪問 (坂西、中村、濱)
日本語復習ボランティア説明会 (芳田、中島)
 - 18日 神戸親和女子大学 講義 (坂西)
 - 19日 辞令交付式 (坂西、中村、中島)
 - 22日 外務省NGOインターンプログラム説明会 (坂西)
KOBエウクライナ避難民支援ネットワーク 情報交換会 (坂西)
 - 25日 武庫川女子大学 加藤先生 来訪 (坂西)
三田市国際交流協会 訪問 (坂西、中村)
 - 26日 PHD協会 経営会議 (坂西、中村、中島)
 - 27日 定例スタッフ会議 (坂西、中村、芳田、濱、中島)
 - 28日 甲南女子大学 講義：NGO相談員 (坂西)
HYOGON新春フォーラム (坂西)
 - 29日 六甲ウィメンズハウスWS (坂西)
NGO神戸外国人救援ネット 法人化委員会 (坂西)
- 5月**
- 2日 兵庫県立大学大学院「国際保健」：NGO相談員 (坂西)
プラスONEネット 来訪
 - 5日 38期研修生 アシカ・チャルマカール 来日
 - 7日 NGO等提案型事業 加東市 畑×多文化共生 交流会 (坂西、濱、佐久間)
 - 9日 NGO神戸外国人救援ネット 運営委員会 (坂西、濱)
神戸親和女子大学 講義 (坂西)
 - 10日 出入国在留管理局 神戸市局 受入環境調整担当 訪問 (坂西、濱)
大学コンソーシアム 訪問 (坂西、濱)
 - 11日 外務省主催NGOインターンプログラム説明会 (坂西)
One World Festival for Youth 監査 (坂西)
 - 13日 神戸YMCA大会 実行委員会 (坂西)
 - 14日 HYOMIC運営委員会 (坂西)
 - 16日 明石清水高校 講演：NGO相談員 (坂西)
神戸親和女子大学 講義 (坂西)
HYOGON 監査 (坂西)
 - 18日 篠山ロータリークラブ 例会 (坂西)
 - 19日 神戸市シルバーカレッジ 講義 (坂西、濱)
- 6月**
- 1日 技能実習制度廃止！全国キャラバンIN神戸 (坂西)
篠山ロータリークラブ 例会 (坂西)
 - 2日 HYOGON運営委員会 (坂西)
 - 3日 職員研修 (坂西、中村、芳田、濱、中島)
大和キリスト教会支援委員 来訪
神戸YMCA会員総会実行委員会 (坂西)
真如苑 来訪 (坂西)
 - 8日 KOBエウクライナ避難民支援ネットワーク会議 (坂西、佐久間)
NGO神戸外国人救援ネット 法人化委員会 (坂西)
 - 9日 PHD協会 評議員会 (坂西、中村、濱、三宅、中島)
NGO相談員 ランチミーティング (坂西)
 - 10日 コープ委員会 学習会
 - 11日 ウクライナ救援募金 コープこうべ兵庫店 (坂西)
 - 13日 連携推進委員会・賛助会員向け説明会 (坂西)
NGO神戸外国人救援ネット 運営委員会 (坂西)
神戸市企画調整局政策課つなぐ特命担当 来訪 (坂西、濱)
神戸YMCA評議員会 (坂西)
 - 15日 38期研修生 シェアリング (坂西、中村、芳田、濱、三宅、中島)
 - 16日 特定非営利活動法人まなびと 来訪 (坂西、濱)
 - 17日 One World Festival for Youth 実行委員会 (坂西)
 - 18日 38期研修生 来日報告会 (坂西、中村、芳田、濱、佐久間、中島)
 - 20日 社会福祉法人いたみ杉の子 訪問 (中村)
HYOGON総会 (坂西)
 - 21日 神戸YMCA国際委員会 (坂西)
 - 22日 JANIC総会 (坂西)
六甲ウィメンズハウス会議 (坂西)
日本財団 ヒアリング (坂西、佐久間)
コープともしびボランティア振興財団 理事会 (坂西、佐久間)
 - 23日 兵庫県いなみ野学園 講演：NGO相談員 (坂西)
 - 24日 外務省NGO相談員 連絡会議 (坂西、中村、三宅)
 - 25日 神戸YMCA大会 (坂西)
 - 26日 HYOGON福祉ネット 総会 (坂西)
 - 27日 日本財団 オンライン会議 (坂西)
 - 28日 株式会社メロディ 訪問 (中村)
コープ委員会 学習会
 - 29日 定例スタッフ 会議 (坂西、中村、濱、佐久間、中島)
 - 30日 公益法人NGO連絡会 (坂西)



プラスONEネット主催の料理教室



加東市・多文化共生ガーデン



3年ぶりに開催した来日報告会
38期研修生、国内研修生、多文化
共生インターンが揃いました

宇宙船地球号で暮らす -多文化共生してる?-



植松 賢治
PHD協会 理事
神戸市 東灘区役所 区長
区長お散歩日記 (東灘区役所HP) を更新中

神戸国際コミュニティセンター (KICC)、神戸市国際部と6年間にわたり、日本語学習の機会、多言語による相談業務、ベトナム語によるFacebookの立ち上げから、市内東・中・西部の日本語学習拠点の整備、医療通訳など多くの多文化共生に繋がる機会の拡充を行いました。ちょうど、特定技能制度という外国人受け入れ施策の転換点にあたり、国の留学生30万人計画が2019年に前倒し達成され、ベトナム人他ニューカマーと言われる方々が市内に急増していた時期でもありました。

言語の壁を少しでも低くするこれらのサービスを必要な方々にどのように届けるのが課題でした。新たに市内日本語学校や入管などとの定期連絡会の開催、外国人コミュニティへの協力依頼を行いました、十分ではなかったことを覚えています。

コロナ禍により、外国人受け入れは足踏み状況ですが、少子高齢社会において外国人の方の力が必要な状況は今後も続くと思います。

多文化共生は、国籍や民族の異なる人々が、互いの違いを認め合い尊重することがスタートです。そのため、まずは言葉の壁を解消し、外国人の方々が暮らしやすい環境を整えることが、地域に根差した多文化共生の一歩だと信じています。

日々是 東奔西走 研修担当 芳田弓生希

『With コロナの 研修事業』



自転に乗る練習をする
アンカさんと自転車
を支えるブディさん

今年度は、研修生が安心して研修し、また皆さんも安心して研修に関わっていただけるよう進めていくことを目指している。研修事業を行う上で、これまでの大きな違いは、年間を通じて研修生を受け入れてくださるホストファミリーをおかないことだ。研修生たちが元気に研修を続け、精神的にも大きく成長できる背景にはホストファミリーの存在があった。ホストの方々には、研修生を家族同様に受け入れていただき、会話も多く、心身ともに支えていただけてきた。しかし今年度の研修生たちは、シェアハウス「みんなのいえ」に住み、自炊している。研修生たちの自己管理、精神的負担、日本語力の伸びが当面の課題だと感じた。そんな中、ありがたいことに状況をご理解いただいた上で、年に何度かホームステイを受けても良いと手をあげて下さった方がいた。アシカさんが「みんなのいえ」唯一の女性居住者であることを考慮に入れ、早速彼女を短期間受

け入れていただき、来日後の不安定な時期を安心して楽しく過ごさせていただいた。今後も何度か受け入れをお願いし、また新たに手をあげて下さるご家庭があれば、そちらにもお世話になりたいと考えている。現場研修の実施にも課題がある。コロナ対策として研修生たちは抗原検査を行い、陰性であることを確認してから研修先へ出かけるようにしているが、コロナ禍で外部者の受け入れや研修対応が困難で、今年度は研修生の受け入れが難しいとおっしゃられるケースもあり、特に保健衛生分野での研修を組むのに苦戦している。しかし「新しい研修先となりうるのでは？」と繋いでくださる方もおられる。少しでも研修生の希望に沿った研修が組めるよう、ご縁を大切にしながら研修事業を進めていきたい。



政党の定期総会に参加するサビナさん

特集 サビナさん、ネパール統一地方選挙に当選！

ネパール統一地方選挙に当選した2018年度・36期研修生のサビナさん。市議会議員（任期5年）として、地域をこえ、ダリット女性のさらなる地位向上を目指します。ネパール在住5年、カトマンズにて柔道などのスポーツ・教育サポートをしている古屋祐輔さんに、今回の選挙背景をレポートいただきました。また、次号にて、詳細な政治活動とともにサビナさんのインタビューを掲載予定です。

ネパール統一地方総選挙について

2022年5月13日、ネパールでは5年ぶりの統一地方総選挙が行われた。

ネパールの選挙は日本の選挙と比にならない程盛り上がる。日本人たちにも分かりやすいように例えようとしても、日本にネパールの選挙ほど盛り上がるものはあるだろうか。あえて例えるなら、日本の正月とお盆と、そしてオリンピックが一気に勢揃いしたような、ネパールの選挙というのは、それくらいの大行事なのだ。

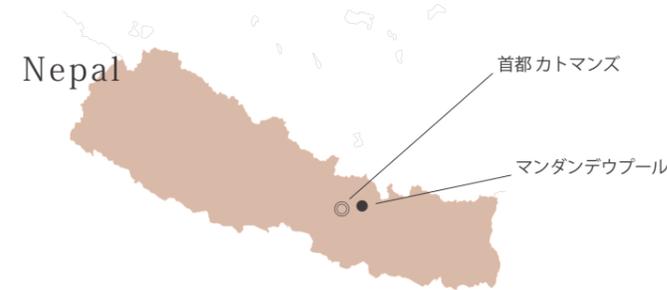
選挙時期にネパール人との仕事をする際にも「もうすぐ選挙だからさ、今は仕事できないね」って断られる。なにせ選挙の期間は1週間の休みになり、行政機関も学校も企業もほとんどが休みになる。これは首都カトマンズに住んでいる人などが地元で投票するために帰省できるよう国民の休日を作ったのだ。今回の選挙の投票率も70%ほど。これは選挙に参加できない海

外に出稼ぎに行っているネパール人を含めての数なので、相当な数字なのだ。

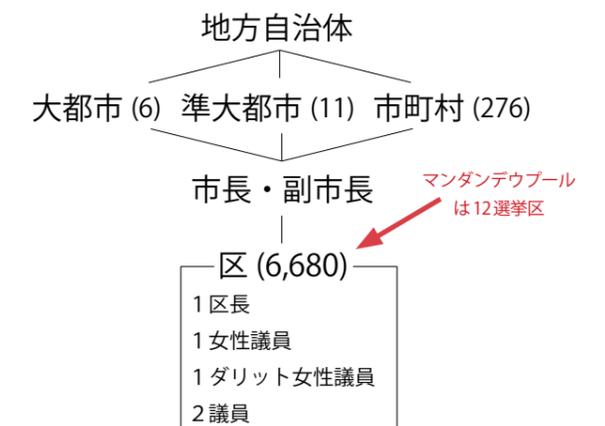
そんなネパールの選挙という一大行事にサビナさんが手をあげ、そして皆から票を集め当選することができたことは素晴らしいことである。多くの人がサビナさんに新しい風を期待したのでろう。

ネパールの政治は地方ごとに司る党が違う。日本の地名で例を挙げると神戸市は〇〇党が選挙で勝ち上がり、明石市は△△党が勝ち、各々の市ごとに政党が違うのだ。より国民一人一人の主権、発言権が強くなるメリットもあるが、隣同士の市でのいがみ合いも激しく、より大きな決め事には対応しきれないデメリットもあるのだと言う。

サビナさんは、マンドンデウプールという市でネパール会議派（Nepali Congress）という政党から出馬の要請を受け立候補した。ネパール会議派とはネパールの現首相の政党でもあり、ネパールで昔からある大きな政党だ。今回の選挙は政



（ネパールの選挙制度）



党ごとの投票であり、マンドンデウプール市でネパール会議派が一番の票を集め、サビナさんも当選したという流れである。

少し話は変わるのだが、ネパールはカースト制という身分制度がある。サビナさんはその中でも一番下である不可触民とされているダリットの出自だ。今はネパールの法律でもカーストで差別をしてはいけないとはされているが、いまだにカースト制度は根強く存在している。ネパールに住んでいる私の感覚なのだが、20代くらいまでの人はカーストをそこまで気にしていないのだが、30代以上の人たちになると「あの人のカーストはどこなんだ？」という話はよくして、身分ごとの違いや、差別している感覚はよく分かる。

ネパールではダリットの人たちを昔から虐げてきた歴史があり、ネパールの中でもダリットへの差別を是正させようという動きがある。今回のネパールでの選挙でも地区の各政党の中にダリット女性の候補者を含めなければいけないという決まりがあり、サビナさんはそこでネパール会議派から声がかかったのである。サビナさんがPHD協会の元で日本に研修に行ったことや、コロナ禍の中で村の人たちに食糧を配ったりなどの活躍が、多くの人に知られ、ネパールで一番大きな政党のメンバーとして認められたのである。

サビナさんに「これから政治で何をしたい？」と聞いたら「まず一年目は勉強。色んな人からたくさんのことを学び、それから私の役割を果たしたい」と、あくまで謙虚な姿勢は変わっていなかった。

今回の選挙では、カトマンズは無所属である31歳の元rapper兼エンジニアの人が市長に当選し、副市長はヒンドゥー教大国のネパールの中で珍しいクリスチャンの女性が当選をした。

ネパールの中で今までの旧態依然の体質から脱却するために新しい人材を取り込もうという姿勢が反映された結果のように見える。これからネパールを良くしてくれるのは、今までにない価値観をこの国に入れてくれる人たちのだろう。

サビナさんもそのうちの一人だろう。「ダリットの差別と戦っていきたく」と語っていたサビナさんなので、これからどのように国を変えていくのか温かく見守っていきたく。



マンドンデウプール9区 政党の選挙ポスター



当選した証明書とともに

PHD News

訃報



2018年11月ネパール訪問時

PHD運動提唱者である岩村昇先生の伴侶であられる岩村史子さんが2022年3月19日、93歳で天に召されました。史子さんのPHDへの多大なご貢献に感謝し、御霊の平安をお祈りいたします。



アフダールさん、タベ村の自宅にて

アフダールさん逝去

(2000年度研修生・インドネシア出身)

5月16日 タベ村の村長さんことアフダールさん(52歳)が永眠しました。突然の脳梗塞で、病院に運ばれてわずか1週間ほどの事でした。村からも元研修生たちが駆けつけましたが、祈りも虚しく旅立ちました。誰にでも平等に優しく、皆に愛されたアフダールさんは、村長を辞してからPak. Jorong(村長さん)と呼ばれ親しまれていました。バイクで村を回り熱心に村の人々の話に耳を傾ける姿は今も忘れられません。天国でもどうか変わらない笑顔で。さよなら村長さん!

新加入組が感じた PHD

○月×日のPHD協会

職員 三宅 滋賀からの通勤。もっといけると思ったけど、想像よりきつかった。約2時間、近畿6県の内、4県を横断。もはや旅行。在宅勤務増で対応中。

国内研修生 結城 来日報告会で初司会&初の民族衣装。ネパールのクルタを着るも、アシカから「いい感じじゃないですね」とばっさり。遠慮ない言動は仲良しの証拠?

多文化共生インターン ミヨ 料理上手のミヨさん。ある送別会で、ミャンマーのしゃぶしゃぶを作るも、うっかり日本人用に辛さを抑えるのを忘れる。でも皆で汗をかきながら必死で食べてくれて、嬉しかった。

職員 佐久間 初出勤日の関心は職員の服装。事務局長はスーツ、中島はカジュアルでモヒカンだ。自由だ!でも初心者なので、まだ短パンで出社できない。

多文化共生インターン ハー おしゃべりなハーちゃん。いつもささっと昼食を食べて仕事に戻る職員。が、彼女がいると巻き込まれて1時間休憩をとることに。休憩がきちんととれるのは「私のおかげ」と本人談。

以上、朝起きるのが早そうな順

◆ 「みんなのいえ」 マンスリーサポーターを募集しています。



公的サポートを得られず行き場を失った外国人の方が、生活を立て直すための準備をするシェアハウスです。毎月継続して「みんなのいえ」の光熱水費・食費・医薬品・消耗品費・修繕費などを支えていただくご寄付です。

- ・ マンスリーサポーターになっていただいた方には、
- ・ 月1回「みんなのいえ」の様子やお礼をメールでお送りします。
- ・ 会報「PHD LETTER(年3回発行)」と事業報告書をお届けします。

「みんなのいえ」

マンスリーサポーター申し込み



マンスリーサポーターのお申込みは、当会Webサイトまたは上記のQRコードからお願いいたします。